

江戸の一教養人の読書の跡

—『志不可起』・『潤色詞林三知抄』の著者箕田憲貞の場合—

白 木 進

目次

- 一、箕田憲貞という人
 - 二、主著二書と比較
 - 三、両書に見る箕田憲貞の読書の跡
 - 四、著作に引用した書目表から推察する箕田憲貞の教養
 - 五、箕田憲貞の生きた江戸中期の時代相
- (付)一、語彙「かたこと」の系統に有縁と思われる後続書のまとめ
二、「かたこと」の著者安原貞室の書翰について

前註 前稿「志不可起」を読む(以下、前稿という)——日本文学研究19号——で、資料の「志不可起」の標出項にI、IIの通し番号を付し、引用に便した。
今回新たに資料に加えた「潤色詞林三知抄」にも、上巻の冒頭「いもる(潔)」をIとし、以下順に番号をふると、下巻すの最後尾「すゞる(辛)」は870となった。本文中で両書の引用項目に冠するアラビア数字は、それ〴〵右の通し番号である。

一、箕田憲貞という人

身分・経歴など未だ明らかでない。この人を取りあげた他書の記事も見当たらないので、今の所その残した著書の記事から推定する

江戸の一教養人の読書の跡 —『志不可起』・『潤色詞林三知抄』の著者箕田憲貞の場合—

外はない。

前稿では主著「志不可起」III項の記事から、著者は武家に育ち、それも身分は高くない御家人程度、文に励み武に努め、早く俳諧の道に遊び、晩年は読書に親しみ、著述に心がけた人、と推定した。

今回はもう一つの主著「潤色詞林三知抄」も併せ吟味し、両主著の内容比較を試みると共に、両書に引用された書目を調査して、著者の読書の跡と教養の相とを探って見る。

箕田憲貞には著書として左の四点が確認される。

(1)「志不可起」七巻七冊(自筆稿本は国会図書館蔵)

末尾に跋文あり、曰く

此志不可起七冊の草案は余星を載き霜をふむのかたいとまに不図思ひよりていろはよせにつれ〴〵と書あつめ侍りし猶よくあぢはへてさやかに書改まほしかりつれとも年の矢のすみやかなるに其事となくて既にし夕の日にせまりぬ中〴〵やりすてんと思ひしかともうちかやして思ふに干早振我心よりなすわざとよめることくにかう思ひよりて書つゞりぬる事も余か私にあらず天地よりうけ来る父母所生

の本姓よりなせる事にし侍れは無下に思はへてこのまゝにて残し置
侍りぬ後昆余が志をたすけて改しめなば幽冥に徹て笑の花栄え
んものをや

于時享保戊申季秋下弦

江都 蓑翁 箕田氏憲貞

(2)潤色詞林三知抄 (自筆稿本は静嘉堂文庫蔵) 上下ノ二巻一冊

巻頭に序あり、曰く

ちりひちよりなりて白雲かゝる降となるやまとことのはの林にし
げき良材ハ拾ふともいかに事つきなんしか有が中にも常に取りて
あつかふ初の心のたすけとなれかしとてにやいつれの御代にか三
つを知と題したる抄上下の巻有(1)連歌のことばと(2)文字と(3)去嫌
の式を知といふの心ばへならんか予是にもとづきて猶又見ん人をし
てひろひやすからしめんがため其(1)次第をいろはよせになし且(2)
少づゝ文字の義など書加へ(3)他書を抜入て潤色し侍り誠
に先書をもとくに似たれども全さにはあらず只ふりみふらずみ
の空のすさひに手に及ぶ斗の事のはをかきよせ侍るのみ時に享保
の旃蒙大荒落応鐘下の弓はりのころほひ露叟箕田憲貞毫
を武江の下谷にとる

註イ、(1)(2)(3)の数字は筆者の加註。

ロ、旃蒙は十干の乙の意。享保では10年が乙巳、20年が乙卯で
ある。

右二書の跋文と序により、前著「志不可起」は享保戊申(即ち13年)1728
の脱稿であり、後著「潤色詞林三知抄」は享保10年(もししくは同20
年)の成稿。而してその著者名は箕田憲貞、蓑翁また露叟と号し、

江戸下谷(現台東区下谷町で上野駅に近い)の住人であるを知る。
年令一生没年の推定

「志不可起」28(ちよいノ条)に

…チヤ卅歳バカリノ比延宝(1673—1680)天和(1681—1683)年中マデ…

の記事がある。よつて仮に1680を30才と見れば、その生年は1650、慶安
3年であり、「志不可起」跋文を書いた享保13は1728年で78才であ
る。「潤色詞林三知抄」の成稿は序に享保旃蒙とあるが、旃蒙は十
千の乙の意であり、偶ま享保の年号は20年続き、10年が乙巳、20年
が乙卯である。凡そ文筆に携わる程の者が紛らわしい干支を記す筈
はないから、本書は享保10年乙巳の年に成り、時に著者は推定年令
75才。その後3年で「志不可起」も脱稿し、やがて死没したものと
見たい。享保が20年も続き、再び旃蒙(乙卯・20年)を迎えようと
は本人は夢想もしなかつたに違いない。

(3)潤色詞林三知抄の附巻

「志不可起」70(あたりノ条)に、

愚述潤色詞林三知抄ノ附巻ニ委シ

「潤色詞林三知抄のな」の項の冒頭に、なのりそを追加して、
附巻ノ末附巻ニ委

とある。この潤色詞林三知抄の附巻は失われたのか見当らぬ。

(4)つるえノ弁

「志不可起」910(しんたいノ条)に、
是モ愚作つるえノ弁外ニ一帖アリ

と見えるが、この書も現在は失われたらしい。なお「つるえ」の意

は同条に説明している、

つゝえトハ人ノ用ニモタ、ズシテ物ノスタルヲ云是ハ少分ニテモ
つゝえ也タトヒ多分ニ物ヲツカフトモ其義ニアタリタルハつゝるえ
ニアラズ

二、主著二書の比較

箕田憲貞の著書四点は、今二点が稿本として現存する。

(1)「志不可起」については前稿(「志不可起」を説む)で触れたので、ここでは(2)「潤色詞林三知抄」に就き一言する。

(2)潤色詞林三知抄 静嘉堂文庫蔵の稿本は、国会図書館蔵の「志不可起」稿本と同筆。体裁も同じ。

上下二巻。上巻は いーて 40丁。下巻は あーす 33丁。合わせて73丁、一冊に合本。

台本となつた「詞林三知抄」は一条兼良?著、「和歌・連歌・俳諧等二用フベキ古語ニ本字ヲ加ヘタ」使用の書で、神祇・春・夏・秋・冬・雑に分類し、上下二巻。

「潤色詞林三知抄」は之を受けてその字句を解説し、意見を陳べる。その作意は先に引用した序に明らかである。

凡例三あり、その一に曰く、詞林三知抄の本書はそのままひらがなを用。潤色はかたかなを用。と。次に巻下の冒頭の二項を掲げ、この書の体裁を示す。

あ

540あまつかみ 天津神 天神七代的事也私白津ノ字
541あなたうと 安尊私白あなト詞ハスペテヨモクケテモ同
ナシト見ヘタリ安ノ字ヲ書ルモ尤イフカシハ

(A)両書(共にいろは寄せ)の標出項目数の比較

志不可起

卷一	欠(いゝと)	一
二	ち	り11
三	を	わ23
四	ら	む15
五	の	お23
六上	あ	さ33
六下	ゆ	め17
卷七	え	ひ48
計112項	す	45

(B)両書の内容の比較

志不可起

江戸。人たる著者が、江戸中期の漢語・和語・俗語の凡そ三千語を採りあげ、意義と語源の解明を試みた辞書風の随筆。

潤色詞林三知抄

卷上	凡例	一
二	い	ろー
三	ほ	へー
四	り	ぬ6
五	わ	か58
六上	れ	そ21
六下	な	ら1
卷七	あ	さ36
計870項	ひ	35

潤色詞林三知抄

和歌・連歌・俳諧等に用いた古語を抽出、漢字を充て、解説した「詞林三知抄」を、更に潤色し解説を加え、用語も補充した手引書。

江戸の一教養人の読書の跡——「志不可起」・「潤色詞林三知抄」の著者箕田憲貞の場合——

語句の解明を試みる点は同じながら、二書は著作の主旨を異にし、語句選択の方向が違うので、両者が重複する部面は割と少ない。

蓋し先に着手したのは「潤色詞林三知抄」であり、その成稿も「志不可起」の脱稿よりは早く、かつ語句を取りあげる際、歌語の類は「潤色詞林三知抄」の方へ意識して廻したものとと思われる。例えば左の如し。

志不可起709あやにくノ条、…：但潤色詞林三知抄〔614〕ニ委出タリ可見合

但し次にあげる 志不可起161かくなは の如きは、むしろ整理して、詳細は潤色詞林三知抄へ廻すべきであつたろう。

志不可起

潤色詞林三知抄

(卷二)

(卷上)

か161かくなは 古今和歌集ノ短歌ニかくなはに思ひみたれて下略カ古ノ短歌ニかくなはにおもひみ頭注密勘ニからくさものゝ中にとかくちがへたるものゝすぎがきなどのやうにみたれつくりたる油物也順カ和名ニ結果とかけりむすひたるくだものと書たるもいはれありとさまかうさまにちがへたれはみたるゝ事によめりト……

右は重複の最も密な例だが、他にも多かれ少なかれ、重なるものが十数条ある。但し以下に標出項目の類似のもののみを対照掲示

する。

志不可起

潤色詞林三知抄

か169かつ	140カツ
そ312そもく	278そも
な360なまなか	319なまこゝろ
や521やゝもすれば	447やゝ
537やさし	441ヤサシキ
け600けはひ	475けはひ
て682てには	539テニハ
あ704あふなく	609あふなく
740あだ	575あだひと
も1033もろし	843もろき
せ1044せく	851せく
1045せめて	850せめて
1056(せうそく)	849(セウソコ)
1065せんない	852せんかたなし
す1070(すがる)	869スガル
1107すがりつき	

三、著書から見た箕田意貞の読書の跡

(A)「志不可起」引用書目表

「志不可起」は約三千語の漢語・和語・俗語の解説書であるが、字書類は勿論、古典から当代に亘る多くの書物を消化し駆使して

いる。試みに引用書目を書き抜き、五十音別に列挙して見る。
註 数字は引用している項の通し番号
：は3回以上の引用

特に20回以上引用は回数付記した。

- ア埃囊抄222： 阿含経385795 阿房宮ノ賦490 阿弥陀経要解508
イ韻会83： 小韻会328783 医学入門(元ノ李泉)794 伊勢物語86：
伊勢物語抄592 同闕疑抄363： 異物志49 韻学集成779793 陰陽家
ノ法259
ウ謡(鶴61)： うつほ物語399 孟蘭盆経408
エ易経18： 亦詞経294 准南子376： 延喜式970 焉精要記247
オ奥時抄889 おちくぼ物語107 小野算詩文792
カ回文歌357 格致余論794 郭璞注337： 仮字文字遣415 仮名遣ノ
書61 賈島ノ詩29 歌林良材集5231080 漢語抄764 菅家ノ御詠1088
菅三品ノ詩975 漢書62： 漢書音義766 漢書芸(文)志447 管子
110 韓子470 韓非子270 韓退之ノ文879899 願躰俚諺抄245 翰墨全
書764
キ紀齊名ノ詩70 北野ノ御作11： 婦去来辞269 行基ノ歌397 居家
必用799 漁父辞943 儀礼796 錦繡万花合407
ク公事根源295： くせ舞471 旧事記830 俱舍論265 愚問賢注457 黒
谷語灯録795
ケ玄怪録687 玄義584 源氏4： (計72回) 源氏河海抄774： 同花
鳥余情638 同湖月抄653 (源平) 盛衰記879896
コ広韻366： 広雅34： 孝経310： 江(家)次第36： (黄)山谷
ノ詩178795 荒造抄247 黄帝内伝110 高士伝270 甲陽軍鑑821 後漢

江野の一教養人の読書の跡 — 「志不可起」・「潤色詞林三知抄」の著者箕田憲貞の場合 —

- 書320： 虎闕正修論508 古今集86： (計28回) 古今声句伝793
同頭注密勘161： (古今)六帖879： 五経要義764 玉篇245： 穀
梁伝249 呉語853 後拾遺353 御茶目575 後撰集304： 弔古戰場
文72 古鉄伝860 古文真宝(前・後)655： 同診解694： 戸令187
古烈女伝270 困学紀聞598793 金剛経386 根本式627
サ雑古行書780 左伝172： 同杜注： 三教指揮95 山行詩ノ杜牧296
三国志223 三国名臣序327 三重韻(聚分韻略)14662 三十六人集
1014 三千威儀経911 三体詩526 三代実録925 参同契793 三礼図382
三番叟17445
シ字彙24： (計32回) 詞花集568 爾雅328： 爾雅翼52： 詩格92
： 字義略略443 史記2： (計22回) 同索引： 詩経6： (計
24回) 小雅1033： 大雅803 毛伝766： 箋866 六義910：
子虚ノ賦1051 尸子389 (資治)通鑑317853 集覽766 地藏十論経
音義90 事物紀原12376 四分刪補羯磨596 积氏要覧11： 积地動
篇369 积名921 集韻147： 聚分韻略14662 拾遺集75 衆園五分律
160 周語870 十誦律926 秋声賦755 集覽59 周礼322： 注142
述異記482 出要律義626 酒吞童子(草紙)323 酒礼詩話904 潤色
詞林三知抄625709866 貞永式目176： 小学句解72 貞観政要173450
詳校篇海957 聖德太子伝780 抄物815 上林ノ賦644 初学記339 書
経214： 再貢434 益稷475 多方475 舜典694： 説命722
一周書796 大伝601 蔡氏注871 職原抄191： 口訣842 書言
故事47： 諸乘法数768 書札愚抄272 書札袖珍抄1058 字林89：
神異経328819 進学解352 心経御製注374 新古今183： 晋書762
一張漚伝31 神書41 新勅撰集938 神道竊祓28： 続古今1107

セ西域記265 精要記635… 赤壁ノ賦39… 説文26… (計27回) |
 徐注527… 節用集44… (合類節用集76…) 世本869 世話字彙
 116 千五百番歌合253 千載集57… 錢神論740 745
 ノ増韻81… 莊子115… | 郭象注29 | 林注1050 宋史283 452 裝束抄
 730 続古事談721 楚辭411… 孫子143 299
 タ大学52… | 大全1078 太白陰経116 大平記391 581 武田三代記381
 竹取物語749 橘直幹詩365 大戴礼533 陀羅尼集経627…
 チ智度論508 773 中庸97 | 注(朱注) 372 中院通村卿家集309 長阿
 含経925 長恨歌641 1100 枕中記(盧生ノ夢) 100
 ツつるえノ弁940 徒然草75… つれく(草) 268…
 テ庭訓往来127… 程子曰987
 ト唐韻262 童觀抄703 (唐)寶臺曰412 当用書冊329 杜詩ノ注762
 ニ西ノ銘(張子厚) 606 日本書紀(紀101)… 神武紀1034… 日本紀334
 … 神代ノ卷168… (計46回) 神代ノ卷抄682 694 神代卷直指抄1008
 直指抄解247 820 神代口訣抄627…) 日本歳時記889
 年中行事歌合155 552
 ハ白氏文集267… 白居易ノ詩…
 ヒ稗海760 白虎通780 百川記508 百人一首(小倉山山荘色紙歌) 744
 1014 琵琶行330
 フ風雅集938 風俗通328… 風土記738 武経全書661 782 佛説23 佛祖
 通載627 佛本行集経817 | 音義90 普門品674
 ヘ平家物語443… 兵書ニ872 弁正論376
 本報恩経408 (揚雄) 方言337 (揚子) 法言347 墨翟109 法華経62
 … | 序品773… | 妙音品773 | 妙莊嚴王品773 発心集135 172 堀

川百首488… 本草綱目498… 本朝文粹861 梵網経480 翻訳名義集
 265 マ摩訶止観368 | 弘訣724 枕詞燭明集1051 枕草子48… (計20回)
 万葉集59…
 ミ水無月祓133
 ム夢中間答544
 モ孟子16… | 正義495 蒙求780 992 毛晃曰766 文字集略1027 文選3
 … (計52回)
 ヤ八雲御抄723 1082 大和本草95…
 ユ唯識論385 遊仙窟19… 西陽雜俎407
 ヨ楊子399 楊朱109 義経合状312
 ラ礼記27…
 リ六書正偽1030 理窟31 陸徳明曰887 六論衍義和解230 離騷ノ朱注
 402 李林宗(唐)曰412
 レ楞嚴経674 列子1…
 ロ老子725 766 | 道德経52 呂氏春秋1 869 論語5… (計53回) 論
 衡16
 ワ(和漢)朗詠集938 和玉篇14… 和名抄161…
 以上列挙した書目表の異なり書名数は計309。
 (B)「潤色詞林三知抄」の引用書目表
 本書は上下二巻、歌学書の詞林三知抄を潤色解説したもの。やは
 り多くの引用書目が見えるが、この度は使用頻度高きもののみをあ
 げる。

(a) 歌書関係の引用書では、

巻頭凡例の第三に

引歌引詞の略印 万万葉 古古今 後後撰 拾拾遺 後拾後拾遺
金金葉 詞詞花 千千載 新古新古今 伊伊勢物語 源源氏 八
八雲御抄 林歌林良材 徒—徒然草

とある14書の引用回数を見ると、さすがに多く、

書名	上巻	下巻	書名	上巻	下巻	書名	上巻	下巻
万	25回	11回	金	—	—	源	12回	7回
後拾	1回	3回	伊	12回	12回	拾	5回	5回
新古	5回	15回	徒	6回	4回	千	1回	—
林	37回	32回	後	11回	12回	八	31回	40回
古	40回	52回	詞	1回	1回			

となる。外に書名をあげずに、古歌ニ 僧ノ歌 人丸ノ歌ニ 徴子
女王 貫之 等としての引用歌も数十例に上るから、その出自歌集
を調べて加えれば、右書の引用回数是一段と増そう。又上記書から
の直接でなく、その解説・注釈書から引く例も多く、例えば

○古今では古今声句相伝聞書(堯孝法印伝・堯惠僧都記)に拠る、
堯孝曰が33回、堯惠曰が32回。

○伊勢では闕疑抄から11回、愚見抄(兼良)から2回。
○徒然草も文段抄(季吟)を5回引く。

(b) 歌学関以外で使用頻度の高いもの

字彙32回 公事根源18回 日本書紀12回 神代ノ巻6回 大和
本草17回 詩経13回 本草綱目9回 和玉篇9回 等が目立つ。
以上両著書の引用書目をあげたが、定家卿云、俊頼曰の類、源順

ノ詩、李延年が歌の類、字書ニ 或曰 の類で、内容のみを引いて
書目が表面に出ぬ例もかなり多い。

なお著者は之で両著とも解説を完成したと言うのではなく、
64淑睡 兄弟也ノ条に、私曰淑睡ヲ兄弟ニ用ル本據未考
67に、因縁ハ未知

79私曰世のほだしトヨメル歌未考
581 字書ニ不見 642字彙ニ不見

(以上潤色詞林三知抄からの例)
の如く、未解決のまゝ、解を後生に托した面も散在する。

四、著作に引用した書目表から推察する

箕田憲貞の教養

1、漢学の教養

江戸期に学問と言えば、その中樞は漢学である。漢籍は通常経史
子集に四大別する外、小学、雑書などに類別するが、この分類に先
の引用書目をあてると、

(1) 経類

(イ) 五経(詩・書・易・春秋・礼記)

(ロ) 四書(論語・孟子・大学・中庸)

は勿論みな含まれており、

(ハ) 十三經(三礼・春秋三伝・孝経・尔雅が加わる)に広げても、

公羊伝以外はみな入っている。

因みにいう、養老令の学令で大学・国学の制を定めた時、春秋左

中期の一教養人の読書の跡 — 『志不可起』・『潤色詞林三知抄』の著者箕田憲貞の場合 —

氏伝を採り、公・穀三伝を却けている。尔来日本ではとかく左氏伝が読まれ、尊ばれる風があった。

備考 61左伝ノ杜預カ注ニ 53礼記ノ疏ニ

など注・疏の引用が散在する。十三経注疏の刻本が日本に渡来したのは足利末というから、著者は注疏本にも目を通す機会があったのであろう。

(一)音義・校合を扱った經典釈文もある。

(2)史類

(イ)正史では史記・漢書・後漢書・三国志の四史を始め、

(ロ)編年体の資治通鑑、

(ハ)紀伝系の古烈女伝・蒙求も見える。

(3)子類

儒家―荀子 道家―老・莊 墨家―墨翟 法家―管子・韓非子

兵家―孫子・六韜 雑家―呂氏春秋・淮南子など。

(4)集類

(イ)全集的な白氏文集 (ロ)総集的な楚辭 (ハ)詩文を合集した文選・

古文真宝前後集。

(5)小学―出典を探り語源を究め、解説を加えるに当っては字書・辞書

書を広く活用した筈で、

(イ)訓話 方言 広雅 (ロ)字書―玉篇 字彙 (ハ)韻書―広韻 韻会

など。

(6)雑書 (イ)雑考―困学紀聞・白虎通 (ロ)雑記―西陽雜記 など。

以上は引用書目表の中から、中国のものの代表を各類別に抽出したが、之に相応する日本漢籍も勿論読まれている。著者の漢字教養は

本格的で、かなり深かったと言える。

2、佛典

佛典も漢文である。引用された経典は、385阿含経 386金剛経 408

報恩経 773法華経 385唯識論 508智度論 368摩訶止観 376弁正論

11釈氏要覧など。書名を示さず、単に446佛道ニ 3佛説ニ 491佛経

ニ等の語も多い。

508(くふうノ項)に木母寺隱居十如院義洌〔友人〕の話あり。ま

た「潤色詞林三知抄」の表紙ウラに、

此本者武州江戸すみだ川木母寺隱居為樂院持本

のメモ書入れがある。木母寺は天台宗であるが、著者との関連や

本人の宗旨は未だ窮め得ない。

3、神道

370神書ニ 212祭文ニ 979^{イノリ}禱 727神書ノ講師曰ク 338神書講義ニ

等がある。

4、和典

漢籍と並んで、和典の教養も深く、古典の史書では日本紀 風土記

旧事記 三代夷録。文学では源語 枕草子 竹取 勢語 うつば

大和 平語 徒然草 など。歌書では万葉 八代集 などは随所に

引用、俳諧では連歌 歳時記 俳諧うたゝね 宗祇 等の名が出る。

語学関係では415カナツカヒ 61仮名遣ノ書 715仮名文字遣など

に目を通しており、五音相通 同列相通 436一ハ五ニ通フ 697反

切ノ教 1067ツメタル音ノ下ノいハチトヒビク〔連声〕等と使っている。

5、その他

(イ)官制、有職、故実にも詳しく、延喜式 職原抄 公事根源 装束抄 事物紀源 貞永式目など。

(ロ)医学・本草では 794医学入門 747医学ニ 大和本草 本草綱目 藻塩草など。

(ハ)武芸・軍書 636ぶんぶりやうだう 265弓法ノ書 351武田三代記 821甲陽軍鑑 872兵書ニ 661武経全書 59軍書など。

(ニ)芸能関係 472碁 689双六も嗜んだのであろうし、445申楽能 525狂言芝居 を楽しみ、471くせ舞 890歌合 特に謡は17蟬丸ノ謡ニ 61鶴ノ謡ニ 17三番奥 の如く随所に出るから、日常に親しんでいたものと思われる。

要之、著者箕田憲貞は若年より漢学の素養を重ね、又早く俳諧の道に遊んで歌学関係の書にも親しみ、広く和典も涉獵した。「志不可起」に出る508木母寺の隠居、173友閑、510不角、などは俳諧関係の良き友人なのであろう。「潤色詞林三知抄」では、全篇に亘り「成政日記」が15回も頻出するが、成政とは気易く指導を仰ぎ得た先輩でもあろうか。この俳諧・歌学の知識を基に、「詞林三知抄」の潤色を試み、一方では更に広範囲の「志不可起」編著に取り組み、晩年遂に両書とも仕上げた。前者は二巻、合わせて73丁、享保10年成稿(1725年、著者75才?)、後者は七巻(首巻を欠くが、現存22枚の大著)で享保12年に先ず原稿総括、翌13年(1728年、著者78才?)跋文を書き添えた。刊行は実現しなかったが、両書の稿本は幸いに保存された。最後まで加筆を怠らず、著者には充実した晩年であった。筆跡は能筆、草体も規格に適っている。

五、箕田憲貞の生きた江戸中期の時代相

(イ)江戸期三百年間は世界的にも珍しい戦争の無い時期で、鎖国により時勢には遅れたが、国内的には生産、学術、文化を伸ばした。

江戸の町は漁村から発達した新興都市、最盛時は人口104万を数えたが、町人(近国から集まる)が50万人、社寺と武士(全国から集まる)とで50万人。66平方キロの中、町人地は僅かに16%の9平方キロ、將軍様のお膝元へと流入した民衆は「箸の柱に糞の壁」の九尺二間の棟割長屋(便所は共用、入浴は盥での行水、又は銭湯)に、一平方キロあたり5.5万人が詰めき住んだ。残りの84%は社寺地(寺院80、神社20)と武家地で、幕府方は江戸城の將軍を柱にいわる旗本八万騎(享保7年調で、旗本五、二〇五人、御家人一七、三九人)それに大・小名屋敷が三、三九〇を教え、正しく江戸は武士の町であった。

武士の生活を描く書に「折たく柴の記」(新井白石)「夢酔独言」(勝小吉)などあり。参勤交替の制は交通を開き、旅を助長し、江戸と地方を結び、江戸の文化を地方に運んだ。

江戸期文運興隆の二、三の例をあげる。

1 言語 東国語の拾頭は、中期以後遂に京阪語を凌ぎ、地方方言書も江戸語を標準とするに至る。

2 漢学 移入以来千年の努力が実り、本場中国から注目される著述も出る。例えば

- (1)佚存双書(17種 86巻 林述齋) 中国に佚し、日本に残る漢籍を収集。

(2)七経(易・書・詩・左伝・礼記・論語・孝経) 孟子考文(32巻) 山ノ井鼎、補遺32巻 救生観) 精緻な校勘の書。

(3)黄葉夕陽村舎詩集―菅茶山 蘇東坡など中国の詩に、始めて学的批判を加う。

(4)江戸中期 箕田憲貞の生きた時代は三代家光〜八代吉宗の治世下の約80年(1650?〜1730?)で、徳川幕府としても最盛期である。江戸の町も純消費型から生産型へ、河川、堀割を利用した交通網の開拓、水道の普及などで庶民生活も漸く向上し、食事も一日三度制が普及する。文化の中心も元禄頃から京阪よりも江戸の比重が大きくなる。

(1)出版文化の面―寛文から元禄に亘る約20年間の動きを、当時刊行の書籍目録から、要点を抜いて示す。

(点数)	1670 寛文10	1685 貞享2	1692 元禄5
佛書	1677	2493	2799
学問 教養書	877	1228	1472
医書	247	401	454
文学芸能 学芸教養 日用教養	1032	1812	2453
合計	3833	5934	7178
(割合)	年上 同	年上 同	年上 同
佛書	44.3	42	38.9
学問 教養書	22.8	20.7	20.5
医書	6.4	6.8	6.3
文学芸能 学芸教養 日用教養	26.5	30.5	34.3
	100%	100%	100%

(20年間で約2倍の数字の進展に注意)

(2)中期の、著者関連の学界の主要人物生没年表

漢学 林羅山(1583〜1657) 林信篤(1644〜1732) 昌平坂学問所開設は1690年
国学 光圀(1628〜1700) 契沖(1640〜1701) 真洵(1697〜1769) 宣長(1720〜1801)
俳諧 貞徳(1571〜1653) 安原貞室(1610〜1673) 季吟(1624〜1705) 芭蕉(1644
〜1694) 其角(1662〜1707)

右の如き江戸期という時勢、江戸中期という世相に棹さして、箕田憲貞の生活があり、自らも教養人の一員として、「潤色詞林三知抄」「志不可起」などの著述を成し遂げたのであった。

(付)一、語彙 面『かたこと』の系統に有縁と思われる後

統書のまとめ

昭和46年『かたこと』を読み始めてから、原本の調査やそれに由縁する幾つかの書を見て来た。昨年・今年は「志不可起」を採りあげたが、之も「かたこと」を基幹とし、語彙面で「かたこと」の線上に連なる後統書と見たのである。それらをこゝで整理し年代順に並べてみる。(文中の◎は「かたこと」の略号) なお俳諧面・辞書面・方言書面などに関わる調査は更に今後を期したい。

1650〇かたこと 五巻五冊 安原貞室著 慶安3刊 京都―中野版

・荒木版

同出版 貞享3 1685 京都―高橋版

1654〇仮名草子武者物語 三巻 松田(一楽斎)秀任著 承応3刊

武者物語抄(増補版) 寛文9 1688

言葉の謎を説く部分に片言14をあげるが、うち8項は「かたこ

と」一致する。但し

一 一「へんをハ、こぎるへんといひ ④72

一 施行をハ、せんぎやうといひ ④110

などは同意見。

一 鮎の魚をハ、あいの魚といひ ④59

一 一種物をハ、しもつといひ ④480

などは別意見。

1656〇せわ焼草(世話盡) 五卷五冊 皆虚編 明曆2刊 京都

一 西田・野田版

内容は卷一、四季之語 卷二、曳言之語 卷三、付合集 卷

四、去嫌 卷五、回文句で、世話を主とした俳書。11年前の雑舟

の毛吹草、10年前の貞室の水室守と通ずるが、諺(曳言)の扱い

では分類に前進が見られる。

1682〇適言便蒙抄 三卷(首・臍・足)一冊 永井如瓶著 天和2

刊 京都一武田版

雜字訓蒙図彙(改訂本) 貞享4 1683

一 乾坤：十二言語門に分類し字解を主とする。言語門の各巻に「か

たこと」あり、首巻では74項中「かたこと」と一致するのは11項。

如在・満足・異見・勿体・等閑などの項は「かたこと」の踏襲であ

る。臍巻では59項中、11項が「かたこと」と一致、種々砂多の

項に曰く、

かたことと云書(④152)には種々砂多と云を後誤りて種々さ

ったとつめたるにやといへり……

1688〇浮世呉竹(内題は当世嘉多言浮世呉竹) 三卷四冊 藤氏松

中戸の一教養人の読書の跡 — 「志不可起」・「潤色詞林三知抄」の著者箕田憲貞の場合 —

月編 貞享5刊

「かたこと」全800条の中から366条を抜萃したもの。神宮文庫蔵。

改題本が相次いで出ている。↓当世利口談草(まこと意) ↓当世大和言葉(当世大和詞大全)

↓正誤大和言葉

1688〇浮世鏡第三 五卷本のうち第三巻孤本。貞享5刊 天理圖書

館蔵。

序文で「かたこと」の補遺と自認するが、重複する部も多い。叙

述の体裁は

〇じうらく 聚楽也…の形をとり、いわゆる「かたこと直し」の

型となる。全篇310条。

1688〇〇かたこと百廿ヶ条 他書と合刻した全8葉の中の4葉。元

禄頃の刊。国会書書館蔵。

「かたこと」より100余条を取材し、発音面での類別、かつ七五調

に文章を改む。

さんせんなどをさいせん(④168)と はねずに人のいふぞかし

京大頼原文庫の写本「片言なほし」、天理本「元禄なには前句集の「かた事なほし」(写本

も内容は同じ。

因みに右の天理本には「元禄六西七月廿七日……うつし来る」と

あれば、成立は元禄六より前である。国会図書館本は、出版に際

し改名したものであろう。

〇〇世話類聚 写本一冊 岩瀬文庫蔵 海汀疑(木) 軒編 藤井

玄中老翁松月写 この編者と写者は別人か同一人か不明。或いは

浮世呉竹の編者藤氏松月か。享保15写とあるが成立は遡って元禄

頃か。

正篇・雜篇・拾遺の中に、片言詭語 重言12語 を採りあげるが、

取材源に「かたこと」から185項、浮世鏡^{第三}から23項、かたこと百廿ヶ条から3項の投影をみる。

元禄頃から輩出する重宝(調法)記は軽度の辞書であり、大衆の便覧であった。苗村(分ち書きして艸田寸木子とも)丈伯の編著が多く、また書肆が各書を抜萃して編纂した。中には言葉遣いや片言直しを採りあげる型も多く、その例を二、三示す。

1691〇^不重宝記大全 下巻のみ 苗村丈伯編 元禄4刊 大阪・秋田屋

篇中の第八「諸国かたこと」は浮世鏡^{第三}から約半分を抜萃したものの。分類もほぼ同じ。なお第三「萬世話(難)字盡」は浮世鏡^{第五}の抜萃、と佐藤鶴吉氏は記す。(方言四巻7号)

1692〇女重宝記 五巻五冊 苗村丈伯著元禄5刊

女重宝記大成は後刷本 宝永8 江戸で女宝蔵 また新版増補女重宝記

巻一第5項に「女ことばづかひの事」あり。例えばもとにはといふべきを「元来の根元のといふはずさまじ同付たり大和詞の項では、

一こそでは ごふくといふ 一水は おひやの如く、女房詞に類する108語をあげる。

1693〇男重宝記 五冊 艸田子三経 元禄6刊

新版増補男重宝記 元禄15 後の錦囊萬代言鑑は改題本

巻五に「かた言なをし」、「日本諸国詞づかひ」の章あり、大半を「浮世鏡^{第三}」、「かたこと」に取材している。数字で示すと、

男重宝記

浮世鏡^{第三}と類似の項

かたことと類似の項

かた言なをし106項

56

37

日本諸国詞づかひ38項

10

5

1665〇世話重宝記 五冊 元禄8刊

享保刊の俗語故事談はその改題本

いろは寄せの各部の末に「世話のかた言」あり、「い」の部の「世話のかた言」を例にあげると、

一印^{いんち}語といふべきヲるんぢん (42)

など11語は全項を「かたこと」よりとる。

1701〇諺草 七巻七冊 貝原好古編 元禄14刊

凡例にいう、兒女のいひあやまれる片言、都鄙ともに少からず。

さきに都の人、片言とかやいふ書を作り、それより後も、なほ弁正を加へたる書も出来ぬ。

いろはに分類し、諺・俗語を解説し、いろは部類の中、35の部末に「正偽」を置く。例えば「た」の部を見ると、

本文では 直人 47

正偽では 誰 だれと。たの字。にこりていふハわろし 23

など15項の中、10項が「かたこと」と一致する。

1780〇志不可起 七巻七冊 箕田憲貞著 享保13跋
首巻を欠くが、残る標出項目112項の中、少なくとも88項が「かたこと」と類似する。

幕末〇諺苑 七巻 大田方(全齋)編

諺を集む。実収載語三、二八九。「かたこと」が「いはずしてもことかき待るまじきこと葉」としてあげた45の俚諺の中からも、32句を「カナ、ヲシ」という書から、として取材する。

幕末〇俚言集覽 大田方編

増補俳言集 明治32刊 井上頼園・近藤城の増補・改題にかゝる。

先の諺苑を集大成したものの、**俳言諺語**を収むる中に、「かたこと」から、次の書名をあげて、

カナ、ホシ 計12項を引用している。

かなくほし

カタコト

かたこと

1	3	36	84
		引用書名を明記しないが、内容的に「かたこと」と一致する項は、外にも多い。	

幕末にも「かたこと」が引用されている例一、二

○蜀山人大田南畝の一話一言の巻八(1788年稿)に「かたこと」22項を引用す。

○生川正香の**近世女風俗考**(天保年間成稿、刊行は明治28年)下に「かたこと」の46条雪駄の項全文を引く。

(付)二、『かたこと』著者安原貞室の書翰について

作家・人物の研究資料として、書翰は近来頃に重要視されるようになった。

貞室の書翰は現在5件が判明している。

- (1)俳諧の宗匠・点者として多くの句会に臨んだであろう貞室
- (2)狂歌を好み、自らも作者であった貞室
- (3)「かたこと」外多くの著作を残した貞室
- (4)全国の貞門作品を集めた玉海集(貞門句集第4集―作者68人)、同追加の編者である貞室は、その64年の生涯・活動の中で、恐らく数え切れぬ程の書翰を認めた筈なのに、残る書翰が5件とは意外に少ない。

判明している5件の貞室の書翰は、

- (1)島居 清氏藏 大浜元春あてのもの
- (2)姫路―金井寅之助藏 自睡あてのもの
右2件は「安原貞室の書簡二通―島居清」親和国文一巻1号(昭和44、3、刊)に詳し。
- (3)野間光辰氏藏
- (4)敬鈴鹿 登氏藏
右の(3)は亥十月十二日の日附、福六左様人々御中の宛名。(4)は野間氏により、完本色道大鏡に掲載。
- (5)村上泰昭氏報告のもの 三月八日の日附貞室一齋 京 船屋忠右衛門あてである。